

中国人留学生の日本への異文化適応プロセスに関する研究 — 複数経路・等至性モデル (TEM) 分析を通して—

北九州市立大学大学院 社会システム研究科地域コミュニティ専攻
2021M30002 王 媛媛

【論文要旨】

本研究は、在日中国人留学生を取り巻く現状をマクロな視点で整理した上で、事例を通してミクロな視点で留学生らの日本への異文化適応プロセスの実際を描いたものである。それらを通して、在日中国人留学生の異文化適応プロセスにおいて起こり得る問題の支援策についても検討している。

第1章では、日本に留学した中国人留学生の現状と、日本の留学生受け入れの経緯を整理した。また、留学生の異文化適応プロセスと留学生に生じやすい問題を分析し、現行の留学生への支援を概観した。2019年新型コロナウイルス感染症の影響で、留学生の受け入れ数が大幅に減少している中で、中国人留学生の数は相変わらず圧倒的多いことも確認された。歴史の経緯からみると、1984年の留学生受け入れ10万人計画を始め、2008年の留学生30万人計画が最大のトピックと考えられ、日本は、人材育成への貢献、科学研究と社会経済等の振興を目的とした政策の下で、中国人留学生のみならず各国の留学生を積極的に受け入れてきている。しかし、留学生は、大学までは進学するものの、就職や大学院などへ進学せずに帰国してしまうケースが多くみられる。なぜそのようなことが起こるのだろうか。それを追求するために、留学という異文化適応プロセスから生じた問題を検討するがある。この異文化適応プロセスに関連して、原沢(2014)は日本で暮らす外国人の様子を例に、異文化適応のプロセスをアルファベットのU字型の曲線に描くことで、そのプロセスを、(1)ハネムーン・ステージ、(2)カルチャー・ショック期、(3)適応開始期、(4)適応期、の四段階に分けて示している。加賀美(2007)はそのようなプロセスの中で留学生が抱える問題を加賀美(2007)は留学生の抱える問題をマクロレベル、メゾレベル、ミクロレベルに分類し、主に、経済と住宅問題、人間関係問題、日本語学習と心理的問題があることを指摘した。また、大橋(2008)は、中国人留学生は留学前から留学に対して詳しい認識が形成できず、そのまま留学してしまい、結果として日本への適応が難しくなる傾向にあることを指摘した。中国国内の教育や文化で育った彼らが直面している問題は、他国出身の留学生が直面する問題とは異なる部分があることが推測できる。さらに秋山(2016)は、異文化適応には短期適応と長期適応があり、それらは分けて考えるべきだと主張している。特に4、5年にわたって異文化圏に滞在する場合には、あらゆる方面の問題が蓄積され、うまく調整できなければ個人の精神的状態に影響を与えてしまうことも指摘している。つまり、適応すべき時間が長いほど順調に適応している訳ではなく、むしろ持続した援助を必要とする状態になると考えられ、その意味では異文化適応プロセスを幅広いスパンで捉えていく必要がある。

第2章では、第1章を受けて、本研究の目的を提示した。本研究は在日中国人留学生を取り巻く現状を背景としながら、留学生の留学のきっかけから日本で生活を続けるプロセス全体についてミクロな視点で把握し、留学生らの日本への異文化適応プロセスの実際を描くことを目的とする。それらを通して、そのプロセスの時期に応じた支援策についても検討し、現在の、さらにはこれからの在日中国人留学生に少しでも寄与したいと考える。

第3章では、本研究の手法についてまとめている。研究協力者を日本への中国人留学生7名とし、半構造化面接によるインタビュー調査を用いることとした。それによって得られた逐語録データをもとに、複数経路・等至点モデル(TEM)の分析手法にのっとって分析する。TEMとは、等至点に至るまでの経路との概念を用いて、「人間の成長の多様性を記述しようとした方法論の枠組(安田, 2015)」である。等至点まで辿り着くまでに選択肢によって、分岐点が生じやすい。この分岐点を探るとともに、その選択に影響を及ぼす社会的方向づけ(阻害要因)や社会的ガイド(促進要因)にも着目することで、適切なタイミングでの適切な支援を検討することが可能になると考える。

第4章では、中国人留学生7名の事例を丁寧に紐解き、それぞれのTEM図を作成した。
 第5章では、総合考察として、この7名のTEM図をまとめ、全体TEM図を作成した（図1）。

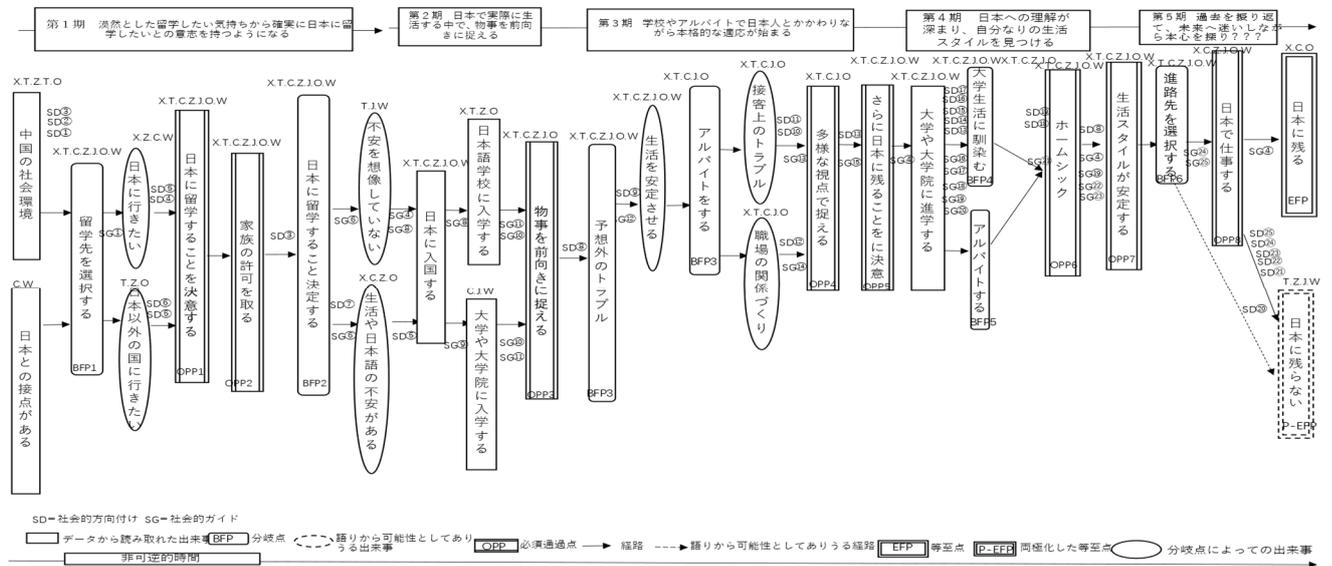


図1. 研究協力者7名のTEM図に基づいて作成した全体TEM図

TEM図を踏まえると、中国人留学生の異文化適応プロセスは、5つの時期に区分されることが考察された。具体的には、【第1期 漠然とした留学したい気持ちから確実に日本に留学したいという意志を持つようになる】、【第2期 日本で実際に生活する中で、物事を前向きに捉える】、【第3期 学校やアルバイトで日本人とかかわりながら本格的な適応が始まる】、【第4期 日本への理解が深まり、自分なりの生活スタイルを見つける】、【第5期 過去を振り返り、未来に向けて方向性を探る】といった5つの時期である。このような適応プロセスの中で、第1期には、【日本に留学する意思を再確認する支援】、第2期には【日本人とのつながりをつくる支援・留学生への支援の存在を知らせる支援】、第3期には、【トラブルの内容に応じた適切な相談先を導く支援】、第4期には、【孤独を防ぐ支援・生活スタイルを見つけるための支援】、第5期には、【学生の家族も含めたサポートを通して、ともに方向性を探る支援】が重要であることを、具体例とともに提案してきた。各時期を通して一番求められているのは、学校と学校の先生の方ではないだろうか。留学生にとって、学校と学校の先生が一番身近な存在で、一番信頼しやすい存在である。留学生は悩みやトラブルがあった際に、家族が近くにいない限り、一番頼れるのは学校である。また、留学生は孤独になりやすいため、留学生から「相談に乗ってほしい」と発信しなくとも、学校の関係者から定期的に声をかけたり、雑談したりして、留学生に1人ではないことを示すことは有効な工夫であると考えられる。このように、異文化適応プロセスの時期ごとの的確な支援と、留学生それぞれへの継続的な支援を通して、留学生の異文化適応プロセスを支えることができればと考える。

参考文献

原沢伊都夫 (2014) 『多文化共生のための異文化コミュニケーション』 明石書店 P6-7P16P79
 加賀美常美代 (2007) 『多文化共生社会の葛藤解決と教育価値観』 ナカニシヤ出版
 大橋敏子 (2008) 『外国人留学生のメンタルヘルスと危機介入』 京都大学学術出版会 P65-75
 秋山剛 (2016) 「医療現場で実際に起こること」 野田文隆, 秋山剛編『あなたにもできる外国人へのこころの支援：多文化共生時代のガイドブック』 P128-156
 安田裕子 (2017) 「生みだされる分岐点—変容と維持をとらえる道具立て」 安田裕子・サトウタツヤ編『TEMでひろがる社会実践—ライフの充実を支援する』 誠信書房 P11-25